

# 冷害に市場開放の圧力 苦悩するコメの行方

ルポライター  
滝川 康治



減反政策や食味偏重の消費者ニーズが大冷害に輪をかけている。コメの緊急輸入に続く市場開放の圧力に、本道農業は大きな岐路に立つ。

## 空知の水田地帯で聞く

10月下旬のある日、空知のコメどころ・滝川市内で11haの水田を作る山口忠さん（江部乙町農協青年部長）と会った。

420戸ほどある同市江部乙地区の水田農家のなかでも、石狩川に近い山口さんのところは最も収量の上がる地

域なので、平年の7分作ほどとか。極端な不作にはならなかったが、地区全体ではもっと出来が悪いらしい。

同農協は、札幌の生活クラブ生協との間でコメの産直事業（本誌「口号参照」）を続けているが、生協組合員たちの実験田では反収3・5俵。平年は8俵と惨憺たる数字だった。提携米は、食管制度に乗せて米穀業者経由で組合

ある。

後継者がいて続けられる農家は3分の1くらいと、稲作の将来を考えれば不安がよぎる。冷夏の影響で去年も不作、それに追い打ちをかける大凶作に青年たちの口も湿りがちだという。

「この不作が3年続くと、農業をやめなければならぬ人も出てくるはずですよ。仲間たちも先行きのことばかり語り語ろうとしない。でも、人は少なくなるけど、そのなかで稲作を続ける意欲はみんな持っている。空知は一番のコメ地帯なので、ここで踏ん張らないと北海道の稲作はつぶれてしまう」と山口さんは表情を引き締める。その言葉から稲作農家としての矜持が伝わってきて、心強く感じた。

## 「きりぎり」偏重のツケ

今年の全国の水稲作況指数は75で、本道は42という大凶作である。道農政部がまとめた今年の農作物被害面積は、水稲と畑作物合わせて55万2000haで、被害額は2000億円近くにもなる。水稲の被害は作付面積の99%、金額にして過去最高の1320億円

員に届けてきたが、今年は割り当て制限のために100%供給できない可能性が出てきたという。

来年の減反緩和が取り沙汰されているが、山口さんは、

「江部乙の稲作農家のうち、純粋な専業は2〜3割くらい。350haほどの休耕面積があるけど、後継者がいなくて名目だけで農家をやっている人と、野菜やハウス園芸などの高収益作物に取り組む人に、両極分解している。復讐は簡単にいかない。今まで出稼

（平年作の約6割相当額）となり、空知管内の被害が最も大きかった。

山口さんの話にもあったように、「きりぎり」偏重が被害を大きくしたことは否めない。元道立中央農業試験場長の中山利彦さん（北海道有機農業研究協議会会長）はこう指摘する。

「今年は低温がきつ、深水灌漑や防風林・網の有無による収量の差が出た。昔は、冷害対策として早・中・晩の品種の配合をやっていたが、今は中生種の『きらら』と『ゆきひかり』に単一化されて、全体の8割を占めている。83年以来、大きな冷害がなかったのに農家も安心して、『きらら』にあらざんばコメにあらず』みたいな消費者ニーズにおおられていた」

日本作物学会も不作の一因に農家が冷害対策技術を使わなかったことを挙げており、味の良い銘柄ばかりを好む市場の要求などで対策が阻害された、と指摘している。中山さんは、本道の稲作環境について、

「歴史を振り返ると、過去110年間に28回の冷害に遭っており、一度（冷害）が来たら2〜3年続く。来年も要



ガットの交渉期限を前に市場開放反対集会（11月6日・札幌市内で）

ぎに行き、経費のからない畑作物を作っていた人はここ1〜2年で復旧し、収入の上がる作物をやっている人は大幅な所得減になる。アスパラの作付面積も飛躍的に伸びているし、今さら水田に戻せない」と実情を無視したやり方に憤る。

減反政策が始まって20年あまり、猫の目農政に戸惑いながら休耕に応じ、何とか生き延びる道を模索してきた農民たちにとって、冷害や自給率が低下したからといって安易に減反緩和を求

注意なんです」と警告する。

そして、本道には冷害がつき物であることを認識して、うまいコメばかりを追求せず、生産者と消費者がお互いのコンセンサスをつくる必要がある、と力説していた。

この秋、札幌などのスーパーや小売店の店頭から、コメが姿を消す騒ぎがあり、20年前の「トイレットペーパー騒動」を彷彿とさせる出来事として、ゆがんだ流通や消費のあり方を実感させられた。

「賢い消費者」はどこかに行ってしまったようだ。逆に今年のような大冷害のときこそ、ぜひたくに慣れた食のあり方や、本道農業の実現を見つめ直すチャンスではなかったらうか。

## 安楽死を迫られる稲作

冷害を理由に国内年間需要量の約2割にも当たる200万トンのコメが緊急輸入される見通しになった。それと符号するように、ガットのウルグアイ・ラウンド（新多角的貿易交渉）でコメの市場開放を迫られており、本道農業は大きな岐路に立つ。



「全道の作況指数42」のなかで続くコメの出荷（滝川市江部乙で）



「さくらら」偏重が被害を拡大した一因に (江別市内で)

11月15日の新ラウンド交渉の合意期限を前に、農業団体などによる「コメ自由化反対」の声が高まっている。同日には、北海道農畜産物市場開放阻止対策本部（本部長・三沢政雄北農中央会長）主催の全道集会在札幌市内で開かれるなど、動きが急だ。

「基本的食料は国内自給が基本であり、ポスト・ハーベスト農業の危険性もある。米価は高いというが、茶碗1杯のご飯とコーヒー1杯とは10数倍の差があり、単純に内外価格差をうんぬんするのはおかしい。コメと抱き合わせで乳製品や澱粉の自由化を迫られる事態も予想されるだけに、北海道への影響

いと誰が保証できるだろうか。

### 道民運動にも課題多く

コメの市場開放に反対する道民運動は、今年2月に農業・消費者・労働団体や町村会、生協などの呼びかけで全道代表者大会が開かれたのを皮切りに、署名活動や中央要請などが精力的に行われた。10月中旬には、各界から61人が参加した「道民代表要請団」が、知事や道議会議長、北農中央会長の書簡を携えてスイスのガット本部などへ直訴に及んだ。

一連の活動の事務局役を務めるのは連合北海道だ。加盟単産は必ずしも自

は深刻だ」（北農中央会）

「府県と違って農業所得で経営を維持している農家が多い。地域経済における農業生産の割合も高く、関連産業も多い。自由化されると経済や雇用、地域社会の維持に大きな影響を及ぼす。特に稲作主体に集約的作物で積極的に経営をやっている若い人たちへのインパクトが強い」（北海道農民連盟と、農業団体は危機感を募らせる。前出の山口さんは、これを日本の農民だけの問題だとは思っていない。

「日本が異国だからという理由で輸入をすると、世界市場に出ている安いコメをやつとの思いで買っている発展途上国の人たちが、そのコメを買えなくなつて困る。食料の自給政策を見誤ると、国内だけの問題でなくなる。仮に日本がコメの輸入国だとして、何かの事情で輸入がストップしたとき、国内で自給するから待つてほしい」と言つても待てないはず。工業製品とは次元が根本的に違うのに、食料を同じレベルでとらえていいのか」と食料自給についての議論の少なさにいらだちを隠さない。

自由化反対の一枚岩ではないが、「本道が最も打撃を受けるし、地域社会に与える影響は大きい。超党派で世論を盛り上げる必要がある」（連合北海道）との立場で運動を展開してきた。

しかし、ガット本部への直訴をめぐつては、紆余曲折があったらしい。連合側は、知事を団長にした直訴を計画した。これには道サイドなども乗り気だったが、道内239農協の総本山である北農中央会が代表の参加を見送つたこともあつて、知事を先頭にした団の構成が実現しなかつたという。

「中央会は、ガット問題は政府間交渉だし、上部団体が対応している」など

### 牛肉の轍を踏むおそれ

「例外なき関税化」が実施されると日本のコメはどうなるのか——反対派を代表する論者の森島賢東大教授は、著書「日本のコメが消える」（東京新聞社刊）のなかで、

「いったん自由化すると、まず加工用から一般食へ、次に家庭消費部門に外国産のコメが進出して、わずか5〜6年で国内年間生産量の3割に相当する300万トンが輸入される。それは、水田の消滅と生活環境の荒廃を招き、無農国に転落する道だ」と予測する。同氏によると、真つ先に影響を受けるのは本道や青森県だという。

「一部の農業関係者や消費者の『自由化しても、高品質のコメは外国では無理』との見方は甘い」という指摘にも説得力がある。本道の場合、91年の牛肉の輸入自由化が酪農家を直撃したことが記憶に新しい。

90年夏ころからホルスタインの雄牛を中心に価格低下が始まり、自由化されるとすべての個体販売価格が暴落

の理由で積極的ではなく、道などが乗りずらかつたのも事実だ。（中央会が）本道に農家のことを思っているらどうか、と思つた。もつと外側に目を向け道民世論を結果していかないと、将来に禍根を残すのではないかと連合北海道の浅田明廣政策・調査部長が首をひねる。

こうした批判に対して、北農中央会の櫻吉参事は反論する。

「連合の取り組みには感謝しているが、こちらの情勢分析があり、かみ合わないこともある。ガット本部に対しては全国段階での働きかけもあり、山場をどう見るかの違いだと思う。代表派遣には資金の問題もあるし……」

いずれにせよ、市場開放の問題は、単にコメの値段や稲作農家の経営といった次元で論じられるものではない。農業を生命を育てる産業として認識できるのか、世界中から食料を買いあさつて南北格差を拡大させるような経済や生活のあり方を認めていくのかどうか——その分岐点に立たされている現実を、一人ひとりが真剣に考えることこそ求められているのである。



端境期に店頭からコメが姿を消した (札幌市内の生協)